

## 明治天皇の行幸を迎えた「行幸御殿」の使用法について

池 田 直 也

IKEDA Naoya

非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者  
神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻 博士前期課程

【要旨】 明治時代、明治天皇は工場や学校などに対して視察目的に訪問を行っていた。この行為は「行幸」と呼ばれ、行幸は工場などの施設だけではなく、政府高官などの上流層の私邸に対しても行われていた。その事例の一つである黒田長濤邸は、日本で最初期の私邸における洋館建設を行った事例とされており、黒田邸洋館竣工の一年後に行幸が行われていることから、黒田邸洋館は行幸を迎えるために建設された「行幸御殿」として位置付けられている。

本稿では、黒田邸洋館のように、行幸に伴い建設された建物（以下、「行幸御殿」とする）が、行幸時にどのような方法で使用されていたのかを明らかにすることを目的に私邸で行幸を迎えた 52 事例のうち、当時の平面図が存在する山田顕義邸、池田章政邸、鍋島直大邸、前田利為邸の 4 事例を対象に、建物概要、平面構成を整理し、行幸に関する資料から「行幸御殿」の使用方法の分析を行った。

結果として、4 事例について、建物の構造、面積、平面構成などについては共通点が見られず、「行幸御殿」特有の特徴はみられなかったものの、行幸時には洋館に天皇の滞在する便殿を設けること、和館には天皇に披露する行事の会場を設けること、洋館の便殿と行事の会場を交互にしながら天皇を接待する形式が共通してみられた。

ただし、便殿として使用された室をみると、前田邸以外では、一階に大規模な客室が存在している場合でも、二階に便殿が設けられていることから、「行幸御殿」では二階に便殿を設けるという形式が存在した可能性が推察された。よって、図面が存在する 4 事例に加えて、行幸を迎えた洋館の外観写真が確認できた、黒田、大久保、大隈、徳川、西郷、大山、川村、土方邸の 8 事例についても便殿の位置を確認したところ、大久保、徳川邸以外は洋館二階に便殿を設けていたことが明らかになり、このことから、明治時代の「行幸御殿」においては、平面構成にかかわらず二階に便殿が設けられるという特徴が存在したことが考えられた。

### Study of the Use of “Palaces” for Receiving the Emperor in the Meiji Era

**Abstract :** In the Meiji era (1868-1912), the emperor visited factories, schools and other places to observe them. The private properties of upper-class people, including high-ranking government officials, were also subject to imperial visits. The emperor visited Nagahiro Kuroda's “palace,” one of the earliest privately owned Western-style buildings, a year after its completion. Scholars therefore view this building as having been built specifically to receive the emperor.

This paper aims to clarify how such properties erected to receive imperial visits were used on

the occasion of the emperor's call. Emperor Meiji visited 52 private palaces, with the floor plans for four structures owned by the important political figures Akiyoshi Yamada, Akimasa Ikeda, Naohiro Nabeshima and Toshinari Maeda still preserved today. After reviewing the overall structures and room layouts, along with recorded details of the imperial visits, this paper examined how the palaces were used to receive the emperor's visits.

The study found that the four palaces had little in common regarding their structure, size and layout. The buildings themselves had no special features to characterize palaces that accommodated imperial visits. All four, however, had a room in their Western-style buildings for the emperor to rest. In the Japanese-style buildings, the palace owners prepared a room for performing arts to regale the emperor. The hosts used the Western-style and Japanese-style residences alternately to entertain the emperor.

The palaces seem to have a unique style of setting up a second-floor room for the emperor's repose. Except for Maeda's palace, the buildings set aside a resting room on the second floor even if they had a large guestroom on the first floor. In addition to the four palaces chosen originally for research, this study also looked into the location of the imperial resting room in eight other palaces owned by Kuroda, Okubo, Okuma, Tokugawa, Saigo, Oyama, Kawamura and Hijikata. The only available records on these Western-style buildings are photos of their exteriors. The research revealed that all the Western-style buildings, except for Okubo and Tokugawa's, had a room for the emperor on the second floor. This finding suggests that many palaces where the emperor sojourned during the Meiji period characteristically had a resting room for imperial use on the second floor, regardless of the floor plan.

## はじめに

日本の住宅は、幕末から明治時代にかけて流入した西洋文化によって大きく変化した。幕末には居留地を中心に、長崎のグラバー邸（1863年）に代表される外国人用の商館や住宅として洋館の建設が行われ、明治初期には高級官僚や資本家などの上流層の日本人用の住宅として洋館建設が行われるようになった。この、日本人用の住宅として建設された洋館について、造家会『建築雑誌 第百五十号<sup>(1)</sup>』には

「赤坂福吉町なる黒田侯爵邸は明治四年の起工にして同七年に竣功……欧風建築様式が本邦に於て適用せられたる初期の様式を示すもの……」<sup>(2)</sup>

との記述が残されており、これによると赤坂区に存在した黒田侯爵邸が日本における西洋建築導入の初期事例であると位置付けられている。

また、誌内には撮影時期は不明だが、黒田邸の外観写真が掲載されており、それによると黒田邸は伝統的な和館と上げ下げ窓を有する洋館で構成されていることがわかる。また、洋館には内観写真も存在し（図2）、椅子や机などの西洋の什器が置かれていることが視認できる。

この黒田邸のように、伝統的な和館に並ぶ形で洋館を建設する形式は「和洋館並列型住宅」と称され、明治時代において上流層の間で流行した住宅形式であるとされている。また、同書内には黒田邸<sup>(5)</sup>



図1 黒田侯爵邸 外観写真<sup>(3)</sup>

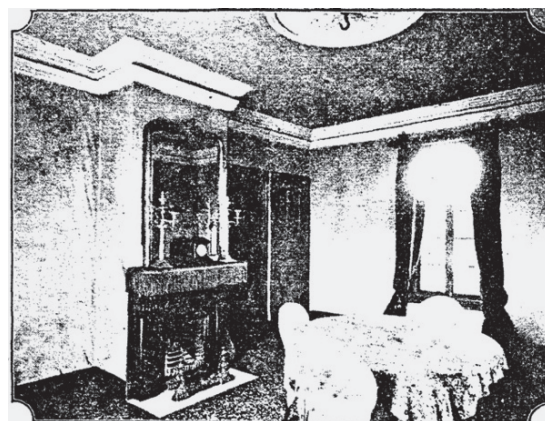


図2 黒田侯爵邸 内観写真<sup>(4)</sup>

について、「畏くも御臨幸あらせられたる当時の珍建築」との記述がされている。臨幸とは「天子（天皇）が行幸して、その場所に臨むこと<sup>(6)</sup>」を意味し、黒田邸に天皇行幸という行為が行われていたことが読みとれる。

黒田邸の起工と同時期の1872（明治5）年には元長州藩主の毛利元徳も洋館建設を開始し、翌年に落成している。毛利邸も「和洋館並列型住宅」の形式で建設されており、1873（明治6）年5月22日に行幸を迎えた。内田青蔵は、この黒田・毛利邸と天皇行幸について以下のように論じている。

「行幸とは、天皇が大名や他の公家の住宅や別荘に訪れることを指し、例えば、江戸幕府の草創期には後水尾天皇を迎えるために京都の二条城二の丸に行幸御殿を建設している。……江戸時代においては行幸は政治と深く結び付いた行為であり、幕府にとっては権威を象徴するための重要な行為であった。そのため、お招きするにあたって専用の御殿を用意し、手厚く迎えた……このような特別な御殿を用意して迎えるという江戸時代の行幸のあり方を考えれば、時代は明治に変わっても行幸のあり方は基本的には同じであったと想像されるのである。とすれば、毛利邸で建設した木造洋館は、天皇を迎えるための行幸用の御殿であったと考えても不自然ではない。時代が明治になり、その御殿は伝統的な建築ではなく洋館に変わったのである。……黒田邸も竣工後の明治八年一月三十一日に明治天皇の行幸を迎えていることから、この洋館も行幸御殿としての性格を持ち合わせていたことは十分考えられる<sup>(7)</sup>」

このように、明治天皇の行幸を迎えるにあたって建設され、その後天皇を迎えた建物は「行幸御殿」として位置付けられている。

ここで、黒田・毛利邸のように、明治時代において私邸で行幸を迎えた事例<sup>(8)</sup>について、『明治天皇行幸年表』、『明治天皇紀』を併用して抽出した結果、52事例確認できた（表1）。

これらの行幸事例については、既往研究にて、行幸と「行幸御殿」建設の関係については述べられているものの、「行幸御殿」自体の平面や、行幸時にどのように使用されていたのかについての分析はあまり行われていない。

そこで本稿では、明治時代に天皇行幸を迎えた「行幸御殿」のうち、平面図が確認できるものを対象に、行幸時の使用方法を整理・分析することで、行幸時の邸宅の使用方法の特徴を明らかにするこ

表1 『明治天皇行幸年表』『明治天皇紀』から抽出した明治年間の私邸に対する行幸事例一覧

氏 名（階級）	行幸実施年月日	住 所
三条 実美（太政大臣）	1871 年 8 月 18 日	麴町区内幸町
岩倉 具視（外務卿）	1871 年 8 月 18 日	麴町区寶田町
島津 久光（従二位）	1873 年 5 月 22 日	麴町区内幸町
毛利 元徳（従三位）	1873 年 5 月 22 日	芝区南高輪町
三条 実美（太政大臣）	1873 年 10 月 20 日	麴町区内幸町
岩倉 具視（右大臣）	1873 年 10 月 20 日	麴町区寶田町
山内 豊範（旧高知藩主）	1873 年 12 月 9 日	日本橋区箱崎町
三条 実美（太政大臣）	1873 年 12 月 19 日	浅草区橋場町
松平 慶永（旧福井藩主）	1873 年 12 月 19 日	浅草区今戸町
伊達 宗城（旧宇和島藩主）	1873 年 12 月 19 日	浅草区今戸町
黒田 長溥（従四位）	1875 年 1 月 31 日	赤坂区福吉町
池田 慶徳（従五位）	1875 年 2 月 7 日	赤坂区青山
徳川 昭武（従四位）	1875 年 4 月 4 日	本所区小梅町
徳川 慶勝（従一位）	1875 年 4 月 4 日	浅草区瓦町
三条 実美（太政大臣）	1875 年 12 月 4 日	麴町区内幸町
岩倉 具視（右大臣）	1876 年 4 月 4 日	麴町区寶田町
木戸 孝允（内閣顧問）	1876 年 4 月 14 日	豊島区上駒込
大久保 利通（参議）	1876 年 4 月 19 日	麴町区裏霞ヶ関町
中山 忠能（従一位）	1876 年 10 月 13 日	麴町区有楽町
木戸 孝允（内閣顧問）	1877 年 5 月 19 日	京都府中京区
大隈 重信（参議）	1878 年 4 月 8 日	麴町区飯田町
三条 実美（太政大臣）	1879 年 4 月 5 日	麴町区永田町
前田 利嗣（従四位）	1879 年 4 月 10 日	本郷区（本富士町）
岩倉 具視（右大臣）	1879 年 8 月 18 日	麴町区寶田町
大木 喬任（参議）	1880 年 5 月 8 日	麴町区裏霞ヶ関町
寺島 宗則（参議）	1880 年 6 月 9 日	芝区白金猿町
島津 忠義（従二位）	1881 年 5 月 9 日	麻布区（別邸）品川区（本邸）
浅野 長勲（旧広島藩主）	1881 年 7 月 11 日	麴町区永田町
徳川 昭武（従三位）	1882 年 11 月 21 日	本所区小梅町
蜂須賀 茂韶（従二位）	1882 年 11 月 21 日	日本橋区濱町
徳川 昭武（従三位）	1883 年 6 月 3 日	（本所区小梅町）
岩倉 具視（右大臣）	1883 年 7 月 5 日	（麴町区寶田町）
岩倉 具視（右大臣）	1883 年 7 月 19 日	麴町区寶田町
徳川 篤敬（従五位）	1884 年 4 月 2 日	本所区小梅町
伊藤 博文（参議・宮内卿）	1885 年 7 月 7 日	芝区高輪町
山縣 有朋（参議伯爵）	1885 年 10 月 19 日	麴町区富士見町
黒田 清隆（内閣顧問伯爵）	1885 年 11 月 27 日	芝区三田
井上 馨（外務大臣伯爵）	1887 年 4 月 26 日	麻布区鳥居坂
松方 正義（大蔵大臣伯爵）	1887 年 10 月 14 日	芝区三田
徳川 家達（公爵）	1887 年 10 月 31 日	渋谷区千駄ヶ谷
西郷 従道（海軍大臣伯爵）	1889 年 5 月 24 日	目黒区上目黒
<u>山田 顕義（司法大臣伯爵）</u>	<u>1890 年 6 月 26 日</u>	<u>小石川区音羽町</u>
大山 巖（陸軍大臣伯爵）	1890 年 11 月 15 日	渋谷区千駄ヶ谷
三条 実美（内大臣・正一位）	1891 年 2 月 18 日	麻布区鳥居坂
川村 純義（司法大臣伯爵）	1891 年 4 月 10 日	麻布区狸穴町
<u>池田 章政（侯爵）</u>	<u>1891 年 11 月 16 日</u>	<u>品川区上大崎</u>
後藤 象二郎（逓信大臣伯爵）	1892 年 7 月 4 日	芝区高輪南町
<u>鍋島 直大（式部長侯爵）</u>	<u>1892 年 7 月 9 日</u>	<u>麴町区永田町</u>
土方 久元（宮内大臣子爵）	1893 年 6 月 2 日	小石川区林町
浅野 長勲（侯爵）	1894 年 11 月 6 日	広島市
徳川 篤敬（侯爵）	1896 年 12 月 18 日	本所区小梅町
<u>前田 利為（侯爵）</u>	<u>1910 年 7 月 8 日</u>	<u>本郷区（本富士町）</u>

（太字は研究対象とした事例を示す。（ ）は『明治天皇紀』から引用）



とを目的とする。

## 研究対象・目的

表1で示した行幸事例のうち、建物の平面図が確認できたものは管見の限り、山田顕義邸（1890年行幸）、池田章政邸（1891年行幸）、鍋島直大邸（1892年行幸）、前田利為邸（1910年行幸）の4事例であった。本研究では、この4事例を研究対象とし、各事例について、建物の概要、様式（和洋）、平面構成などを整理した上で、行幸に関する資料をもとに行幸当日の行動内容を整理し、行幸時の「行幸御殿」の使用方法を分析する。

### I 山田顕義邸（1890年6月26日 行幸）

#### （1）山田顕義邸の概要（所在地・建築年代・建築様式について）

明治天皇の行動を記録した『明治天皇紀 第七巻』には

「二十六日 司法大臣伯爵山田顕義の小石川区音羽町新第<sup>(11)</sup>に行幸」

との記述があり、行幸が行われた小石川区音羽町の山田顕義邸は新築であったことがわかる。そして、より具体的な建物の情報は『山田顕義伝』<sup>(12)</sup>内に記述が存在した。それによれば、山田はもともと1875（明治8）年に落成した麴町の邸宅に居住しており、1887（明治20）年に司法大臣官舎が落成した後は私邸と官邸を併用していたが、1889（明治22）年12月頃に音羽の邸宅が落成し、移転したことが記されていた。落成時期と行幸時期が近いことから、山田邸も黒田邸と同じく行幸に際して建設された「行幸御殿」としての性質を持っていると考えられる。

また、山田邸については、1889年6月28日頒布『建築雑誌 第三十号』に記事と図面が掲載されている。記事では山田伯別邸と表記されており、氏名は明記されていないものの、1889年時点で伯爵という点、記事内には

「本紙の末尾に掲載したる図面は今回小石川区音羽に新築すべき同伯の別邸<sup>(13)</sup>なり」

との記述があり、行幸が行われた山田顕義邸と住所が一致する点から、この山田伯別邸とは行幸が行われた山田顕義の邸宅を示すと考えられる。

建物について、『建築雑誌』には、設計者が工学士の渡部譲、工事請負人は清水満之助と記されており、その構造と規模については

「其結構煉瓦石造にして外部は漆喰を塗抹し以て石造に擬し……建坪五十五坪<sup>(14)</sup>」

とあり、漆喰塗り煉瓦造の洋館で規模は55坪であったことがわかる。また、

(15)  
「右邊には一條の廊下を設け和様の家屋に連絡し……」

との記述から、洋館と和館が渡り廊下でつながる「和洋館並列型住宅」であったと考えられる。

## (2) 山田顕義邸の平面構成について

『建築雑誌』には平面図二枚と立面図二枚が掲載されていた。その平面図をみると、一階には車寄、玄関、応接室、従者室、書斎、客室があり、客室からは縁側に出られるようになっている。二階には寝室、化粧室、臨時用室、広間がある。また、室名の記述はなかったものの、一階階段室の横には小さな室が2つあり、ここが便所であると推察される。そして、『建築雑誌』の記述にもあるように、洋館右側には廊下があり、ここから和館へと接続されていたと考えられる。

また、『建築雑誌』には山田邸の室について以下のような記述があり、

「内部は各室皆其意匠を異にす殊に書斎及客室の如きは木造の天井を用い各種の模様を装置し  
(16)  
以て新奇の観を添へり」

室内でも特に重きを置いて設計されたのが書斎と客室の二室であることが推察される。

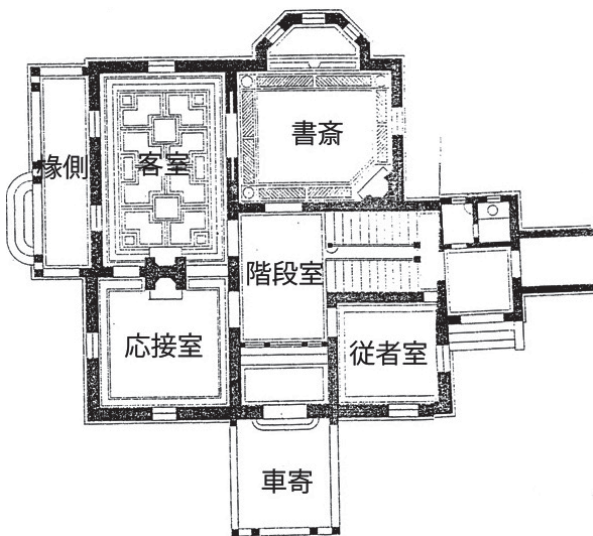


図3 山田顕義邸 一階平面図

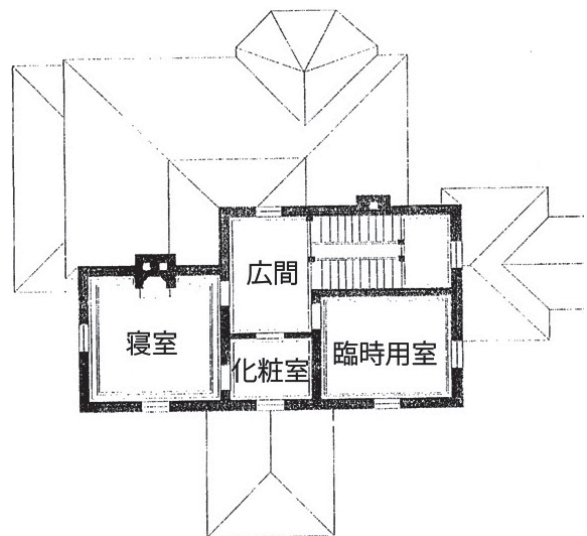


図4 山田顕義邸 二階平面図

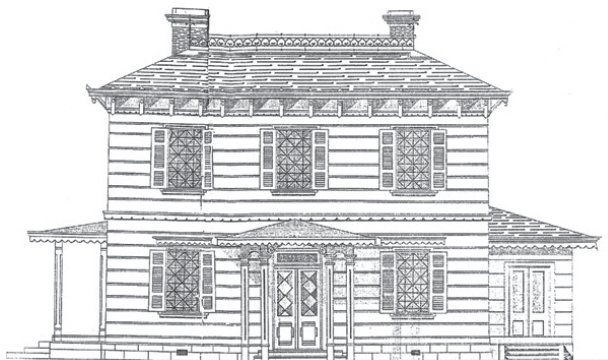


図5 山田顕義邸 表面立面図



図6 山田顕義邸 側面立面図

平図面をみると、一階に応接室、客室などの接客空間、二階に書斎、寝室などの生活空間が設けられているが、食事をする食堂や台所は設けられていない。これについては『建築雑誌』において

「和様の家屋に連絡し以て今日の便に供す又た洋館中会食室の設置なきは該家屋中和洋兼備の  
同室あるを以ての故なり」<sup>(17)</sup>

との記述があり、和館内に和洋兼備の食堂があることを理由に、洋館内には食堂を設けていないことがわかる。その食堂については図面や写真が現存しないため不明ではあるが、和洋兼備との表現から伝統的な床座式と西洋の椅子座式の両方に対応した室であったことが推察される。

### (3) 山田顕義邸の行幸時の使用方法について

山田邸には1890年6月26日に天皇が行幸している。当日、山田邸で行われた行動については『明治天皇紀』において以下のように記されている。

「午後一時三十分御出門……顕義門内に奉迎し、洋館樓上の玉座に先導す……尋いで能楽御覽所に成らせられ、寶生九郎及び梅若實の能樂竝びに狂言を覽たまひ、畢りて庭内を逍遙あらせられ、日暮玉座に復御、桃川如燕の講談を聞召さる、六時三十分日本室廣座敷に於て晚餐を上る……西幸吉、薩摩琵琶錦御旗・尋陽江の曲を弹奏す、餐終り、樓上玉座に復せられ、顯義・同妻及び顯義の母に天杯を賜ふ、是の日樂を玉座の南庭に奏し、紅燈千百を庭内に點綴」<sup>(18)</sup>

行幸当日は洋館二階に玉座が設けられ、そこで山田やその家族に対して拝謁が行われている。また、敷地内には能楽御覽所や庭園が存在し、そこでは能狂言などが行われ、晚餐は日本室座敷で行われた。

前述したように、山田邸では書斎と客室が特に重きが置かれていたと考えられ、その客室は山田邸内で最も大きな室であるが、行幸時にはその客室ではなく、二階に便殿が設けられている。二階で玉座を設けることが可能なのは寝室、臨時用室の二室だが、臨時用室には暖炉が設けられておらず、賓客を招くのに相応しい部屋であるとは考えられないため、寝室に玉座を設けられた可能性が考えられる。

また、晚餐の会場については日本室広座敷と記述されているが、前述したように山田邸洋館には会食室が設けられていないため、和館内の座敷を用いたと考えられる。

山田邸行幸の内容をみると、洋館二階に便殿は設けられているものの、天皇をもてなす行事である能楽、講談、晚餐、薩摩琵琶が行われたのは全て和館であり、晚餐が行われた食堂も和洋兼備の食堂でありながらも和館に設けられていたことから、山田邸においては、洋館はあくまで天皇が滞在する場所であり、その他の行動時には和館が使用されていたと考えられる。

## Ⅱ 池田章政邸（1891年11月16日 行幸）

### （1）池田章政邸の概要（所在地・建築年代・建築様式について）

品川区大崎の池田邸については浅野伸子、平井聖による既往研究が存在する。<sup>(19)</sup>それによると、池田はもともと本所に邸宅を構えていたが、1885（明治18）年末に大崎への移転計画を開始しており、邸宅の建設は1889（明治22）年7月に開始、1891（明治24）年7月に完成したことが明らかにされている。そして、池田は同年7月28日に新邸への移転を行っており、その約4ヶ月後に天皇行幸を迎えた。

池田邸に関する資料として、まず、林原美術館所蔵の『金婚式写真帖』（池田章政・鑑子夫妻が1903（明治36）年に行った金婚式の様子を写したアルバム）内に池田邸洋館の外観写真二枚が存在した。

写真はどちらも洋館のものであり、車寄せ、上げ下げ窓、暖炉、ベランダを有し、ベランダからは庭園が望めたことがわかる。洋館の構造については明らかではないものの、池田家の資料が寄贈され



図7 池田章政邸 洋館 外観写真<sup>(20)</sup>



図8 池田章政邸 洋館 外観写真<sup>(21)</sup>





図9 T5-156-23 大崎邸敷地建物図<sup>(23)</sup>

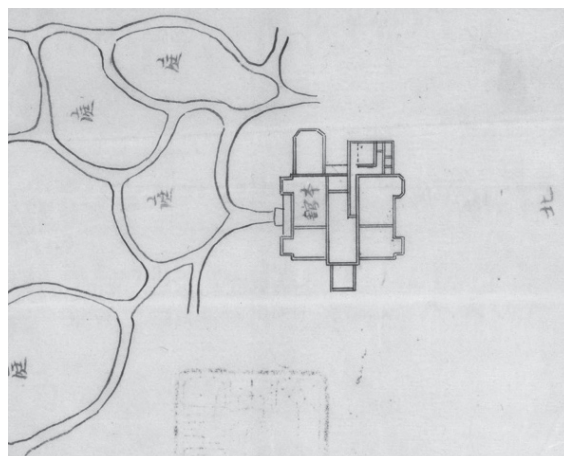


図10 T5-156-2 大崎邸庭園図<sup>(24)</sup>

た岡山大学附属図書館『池田家文庫』内の資料である「C12-197 大崎邸建築費受払勘定」には

「金二万二千七百二十四円三十四銭四厘 西洋館一棟建築入費

内 金一万五千八百三十一円五千一厘 大工方諸入費

内 金一万四千二十七円十四銭九厘木造西洋館一棟建坪百二十九坪……建築入費<sup>(22)</sup>」下線加筆

との記述があり、西洋館一棟の建設費 22,724 円 34 銭 4 厘のうち約半分を大工方に支払い、14,027 円 14 銭 9 厘を 129 坪の木造西洋館の建設に使用していたことがわかる。既往研究では池田邸洋館の建坪は約 123 坪とされており、上記の資料内の洋館面積とほぼ一致する。また、池田邸の外観写真では洋館の壁面に横目地が入っていることから、池田邸洋館は木造であった可能性が考えられる。

次に「T5-156-23 大崎邸敷地建物図」(図9)をみると、図面中央の洋館(図面は後掲)に接続する形で和館があり、池田邸が「和洋館並列型住宅」であったことがわかる。また、「T5-156-2 大崎邸庭園図」(図10)から、洋館車寄がある面が東面で、庭園に面するベランダ部分が南面にあたることが読み取れる。

## (2) 池田章政邸の平面構成について

池田邸の平面図についても、岡山大学附属図書館所蔵『池田家文庫』内に収蔵されており、洋館の平面図に関しては複数の図面が存在していることから、複数回の計画変更が行われたことがうかがえる。本稿では、既往研究で使用されたものと同じ平面である、「T5-156-28-3」<sup>(25)</sup>(一階平面)、「T5-156-28-2」<sup>(26)</sup>(二階平面)、「T5-156-19」<sup>(27)</sup>を使用した。

平面図をみると、一階には車寄、広間、書斎、客室、食堂、御膳所、球戯場、便所があり、二階には客室、居間、寝室、化粧室、大奥居間、侍従詰所、便所が設けられている。基本的には一階に接客、二階に生活空間を配置する形式だが、一階には書斎があり二階には客室があることから、完全に接客と生活空間が階で分離されていないことが推察される。また、一階には御膳所があるが、これについては浅野、平井の既往研究において、和館から食事を運ばせていたことが明らかにされているため、基本的にはここで食事の用意は行われていなかったと考えられる。

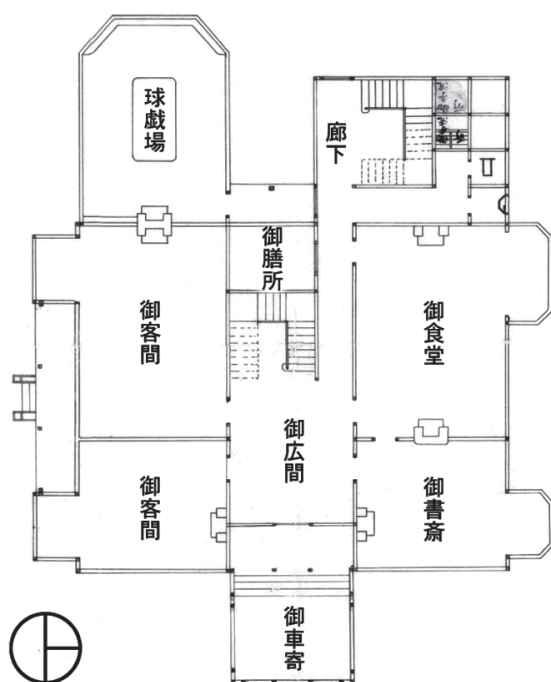


図 11 T5-156-28-3 池田邸洋館 一階平面図

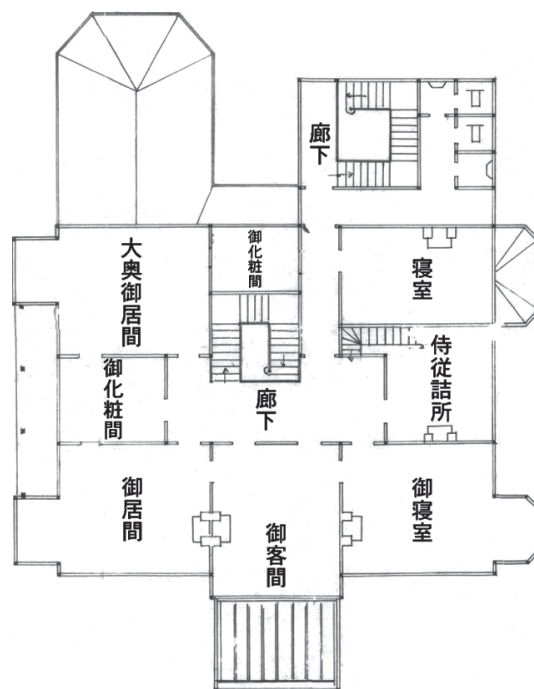


図 12 T5-156-28-2 池田邸洋館 二階平面図

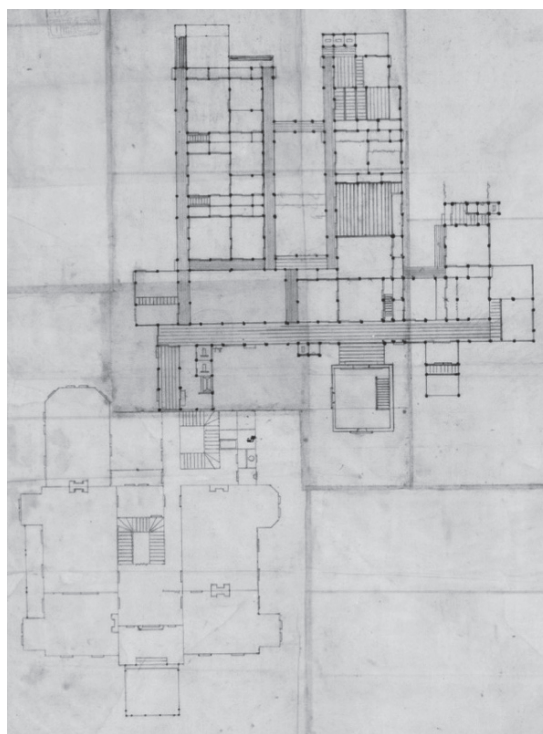


図 13 T5-156-19 大崎邸建造物平面図

### (3) 池田章政邸の行幸時の使用方法について

池田邸行幸に関する資料は『明治天皇紀』及び「明治天皇行幸書類」<sup>(28)</sup>が存在する。行幸当日の行動内容について、両資料を用いて表に整理し、また表と対応させた平面図を作成した。

『明治天皇紀』では便殿は楼上に設けられたとあるため、洋館二階に便殿が設けられたと考えられる。資料には具体的な室名が記述されていなかったものの、二階で便殿に使用できると考えられる室

表2 池田章政邸 行幸時の行動内容一覧

	内容	使用室	参考文献
①	章政並びに夫人は車寄階下北側、一族親族は車寄外西側に列立奉迎	車寄	I
	車駕が表門に通過する際、式部職楽隊演奏し、煙火を掲げる	車寄	I
②	天皇が池田邸に到着、章政は車寄から便殿に先導、御茶菓子を奉献	便殿	I
	章政、夫人、養祖父、その他一族は天皇に拝謁	便殿	I
	供奉の諸官を休憩所に案内し、茶菓を供す		I
	池田家伝来品を奉献	便殿	I
③	御昼食後、時宜により庭内御散歩	便殿	I
④	章政、天皇を能楽御覧所に先導、能楽御覧所にて能楽天覧	能楽御覧所	I
⑤	能楽終わり、再度便殿に入御	便殿	I
	庭園において煙火を掲げる	便殿・庭園	I
⑥	食堂の玉座に着御、供奉の高官達と晚餐御陪食	食堂	I・M
⑦	晚餐終わって、三度便殿に入御	便殿	I
⑧	章政、天皇を表座敷へ先導し講談天覧	表座敷	I・M
⑨	講談終わって便殿に入御	便殿	I
⑩	車駕車寄出御の際、式部職楽隊演奏、煙火を掲げる	車寄	I・M

(Iは『池田家文庫』、Mは『明治天皇紀』より引用)

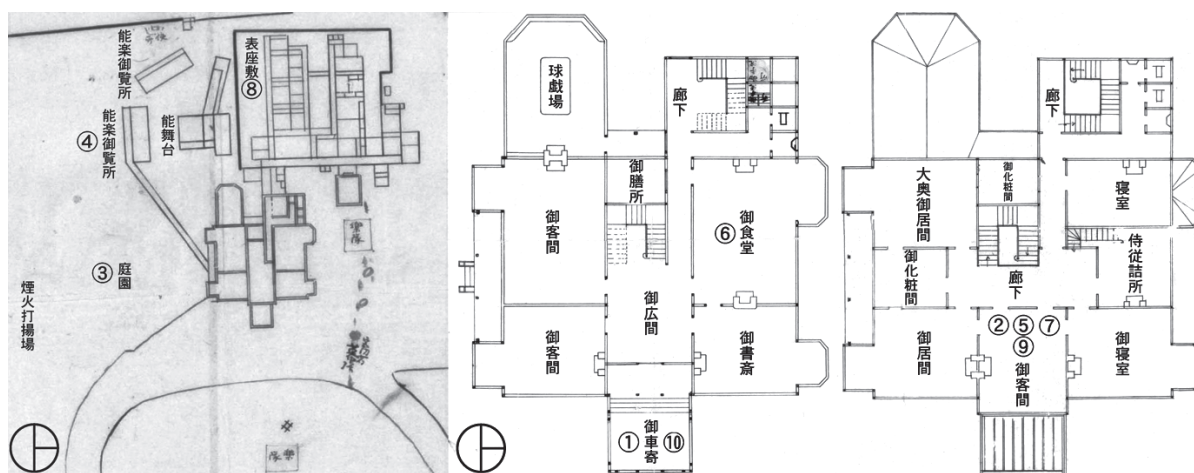


図14 池田章政郎 配置図・洋館一階平面図・洋館二階平面図(室名・番号筆者加筆)<sup>(29)</sup>

は、御居間・御客室・御寝室の三室である。どの室にも暖炉はあり、規模も同程度なため判断は難しいものの、二階の居間や寝室は池田家の私的な空間であったことが推察されるため、唯一接客用の室である御客間が使用されたものと考えられる。また、二階御客間が使用されたと仮定すると、池田邸においても、山田邸と同じく一階に規模の大きな客室があるにもかかわらず、天皇の便殿は二階に設けられる傾向にあったことがわかる。

また、表2をみると、洋館は主に便殿での拝謁や食堂での晩餐会時に使用されており、和館は講談天覧の際に表座敷が使用、その他では庭の能楽御覧所が使用されている。このことから、池田邸行幸時には、天皇は主に洋館に滞在し、和館は行事の会場として用いられており、山田邸の事例とは異なる使用方法であることがわかる。

### Ⅲ 鍋島直大邸（1892年7月9日 行幸）

#### （1）鍋島直大邸の概要（所在地・建築年代・建築様式について）

『明治天皇紀 第八卷』には行幸が行われた鍋島邸について

「式部長侯爵鍋島直大第に行幸あらせらる、第は麴町永田町に在り、建築新に成りたるを以て、特に此の榮を賜ふなり」<sup>(30)</sup>

とあり、鍋島邸は行幸時、永田町に存在していたことがわかる。この鍋島邸の概要については金谷匡高、高村雅彦による既往研究<sup>(31)</sup>にて述べられている。それによれば、鍋島邸は煉瓦造三階建ての洋館と和館が渡り廊下でつながれた「和洋館並列型住宅」で、設計者は工部大学校の卒業生である坂本復経（1855-1888）。1884（明治17）年に設計が開始され、1887（明治20）年7月に設計が終了。同年9月に起工し、1892（明治25）年に落成したことが明らかにされている。

落成した正確な月日については明らかではないものの、鍋島邸洋館の図面が掲載されている『建築雑誌 第五十九号』には

「竣工を来春（明治25年）に延す……落成を奏するは春暖の候を以て期す可き見込」<sup>(32)</sup>

とあり、また、鍋島の娘である伊都子の著書である『三代の天皇と私』には

「完成したのは明治25年の夏……鍋島邸に行幸なさるには、あまりにも季節が悪いと思った父上は『今年はあまりに暑い夏でございますから、秋にいたしましょうか』とお伺いした……『完成したのなら、早いほうがよからう』というお言葉で大安吉日の七月九日と決定」<sup>(33)</sup>

との記述が残されており、鍋島邸は少なくとも1892年7月頃には落成していたと考えられる。

また、鍋島邸の規模については、工学会編『明治工業史 建築編』及び『梨本宮伊都子妃の日記 皇族妃の見た明治・大正・昭和』に記述が残されている。『明治工業史』には



図15 鍋島邸洋館 外観写真<sup>(34)</sup>



「永田町二丁目なる同邸……本館は煉瓦造にして建坪二百十七坪餘、内三階建五坪餘、その他  
附属家ありて、合計三百十五坪餘なり」<sup>(35)</sup>

との記述があり、『梨本宮伊都子妃の日記 皇族妃の見た明治・大正・昭和』には

「鍋島家は現在の首相官邸一帯の地にあった……明治一五年にそれぞれ三〇〇坪ある西洋館と  
日本館の建築がはじまり、一〇年後に完成、このとき明治天皇が来邸……」<sup>(36)</sup>

と記されている。両資料とも、洋館の建坪は 300 坪程度であったと記されており、辻褄が合う。



図 16 鍋島邸 庭園写真<sup>(37)</sup>



図 17 『一万分一地形図』<sup>(38)</sup>

また、『一万分一地形図』で鍋島邸の敷地をみると、庭に面した洋館とそれに接続された中庭のある和館があることがわかり、その規模は地図上ではほぼ同程度で描写されていることから、鍋島邸は洋・和館ともに 300 坪ほどであったと考えられる。

## (2) 鍋島直大邸の平面構成について

『建築雑誌』に掲載されている平面図によると、一階には玄関、脱帽室、広間、玄関番詰所、便所、客室、応接室、日本風座敷、化粧室、浴室、主人居間、婦人室、寝室、侍従室、洗浄室。二階には広間、小客室、客室、客寝室、便所、踏舞室、食堂、配膳室、食器洗室、物置が配置されている。また、鍋島邸洋館には三階部分があり、図面には喫煙室のみ記述されていたが、前述した伊都子の日記には

「西側には両親の住居、寝室、浴室すべてあちらの洋式を取り入れました……三階には姫たちの部屋があり……台所には男女それぞれ四人の使用人……来客の場合でも料理はすべてここで作り……西洋館にも日本館にも広い台所があり食器類が見事に並んでいました。」<sup>(39)</sup>

との記述があり、洋館にも台所が設けられていたこと、三階には喫煙室の他に娘の居室が設けられていたことが読み取れる。以上のことから、鍋島邸洋館には居間、寝室、客室、台所、食堂、便所、浴

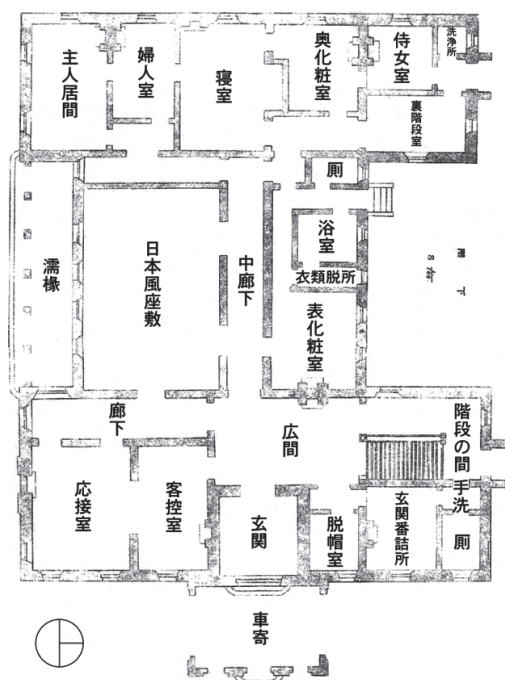


図18 鍋島邸洋館 一階平面図（室名加筆）

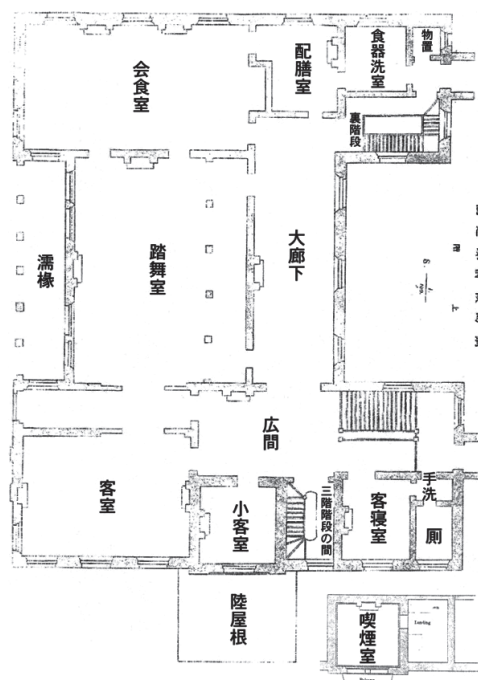


図19 鍋島邸洋館 二・三階平面図（室名加筆）

室、侍女室が存在し、洋館単独で接客と生活、両方の行為を行うことが可能であったと考えられる。

また、洋館北側には2箇所廊下があり、ここから和館へと接続されていると考えられるが、図17の地形図では接続部分が1箇所となっている。これについて、詳細は不明なものの、地形図が1907年頃の実測であることから、増改築されて平面が変化していた可能性が考えられる。また、和館については平面図が現存していないため、詳細は不明である。

### (3) 鍋島直大邸の行幸時の使用方法について

行幸時の邸宅の使用方法については、佐賀県立図書館所蔵『鍋島家文庫』内の「御臨幸之記」、『三代の天皇と私』、『明治天皇紀』に記述が残されている。鍋島邸についても、池田邸と同じくそれらの

表3 鍋島直大邸 行幸時の行動内容一覧

番号	行動内容	使用室	参考文献
①	直大夫妻、車寄階段下にて奉迎	車寄	G・S
	天皇到着し、その際楽隊による演奏		G
②	車寄より階上便殿へ移動	便殿	G・S・M
③	御茶、御菓子を奉献し、拝謁を行う	便殿	G・S・M
④	御休憩後、階下御覧所へ移動し、撃剣天覧	日本風座敷	G・M
⑤	撃剣終わり、休憩後に相撲天覧	日本風座敷	S・M
⑥	相撲終わり、便殿へ移動し休憩	便殿	M
⑦	三階に移動し、ベランダからの眺望を楽しむ	三階ベランダ	S・M
⑧	便殿から食堂へ移動し、晚餐を陪食	会食所	G・S・M
⑨	晚餐後、日本舞踊・手品・講談・薩摩琵琶を天覧	踏舞室	G・S・M
⑩	手品天覧後、便殿に移動し還幸	便殿	G・S・M
⑪	還幸の際に楽隊による演奏	車寄	G

(Gは『御臨幸之記』、Sは『三代の天皇と私』、Mは『明治天皇紀』を使用)

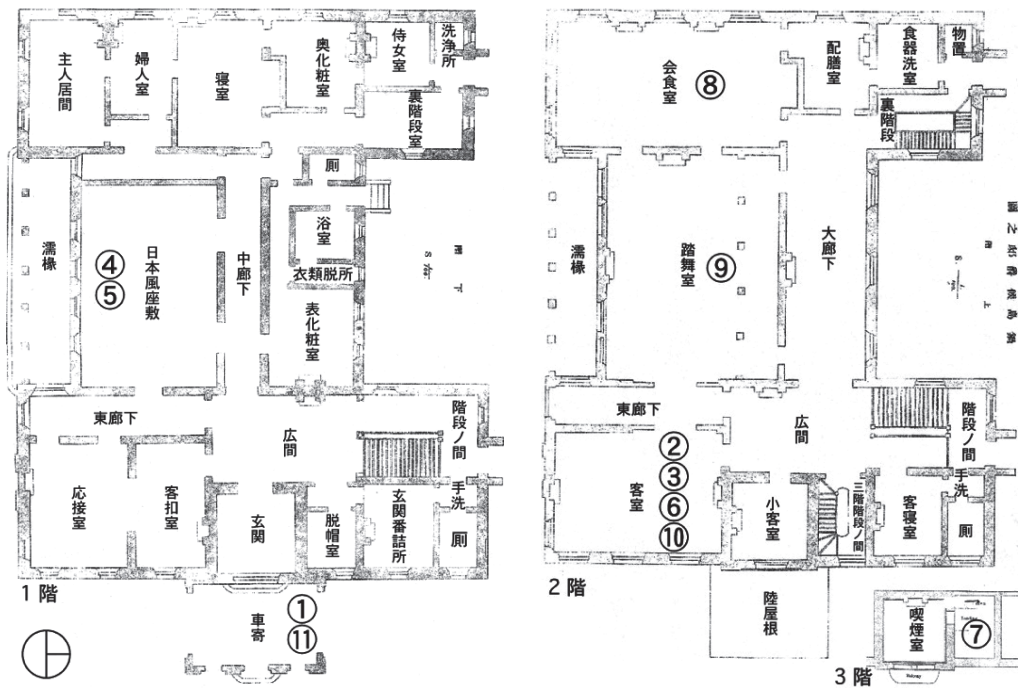


図 20 鍋島邸 洋館一・二・三階平面図（室名及び番号は筆者加筆）

資料をもとに当日の行動表を作成し、それに対応する平面図を作成した。

また、鍋島邸については、『鍋島家文庫』内に行幸時の室配置が反映された平面図が残されており、便殿や御座所だけでなく、その他の室の使用方法も明らかとなった（表 4）。

以上のことから、便殿は他の事例と同じく洋館二階に設けられているが、池田邸の事例とは異な

表 4 鍋島邸 通常時室名・行幸時室名一覧表

一階		二階	
玄関	玄関	広間	
脱帽室	蠟燭室	小客室	御召喚所
玄関番詰所	供奉判任官控所	客寢室	御廁
廁	皇族大臣親任官便所	廁	供奉高等官便所
手洗い		手洗い	
広間	広間	客室	便殿
客控室	大臣親任官控所	踏舞室	手品御覧所
応接室	皇族御休所	濡櫓	濡櫓
表化粧室	来賓奥化粧室	会食室	会食室
衣類脱所		配膳室	配膳室
浴室	浴室	食器洗所	食器洗所
日本風座敷	御覧所玉座	物置	
濡櫓	武術・角力御覧所	大廊下	供奉高等官・侍従控所
主人居間	来賓主人居間		
婦人室	来賓主婦人室		
寢室	来賓寢室		
奥化粧室	来賓化粧室		
侍女室	来賓侍女室		
洗淨所			

り、鍋島邸内で最も大きな二階の客室に設けられていることが明らかになった。また、行幸当日は撃剣、相撲が洋館一階の日本風座敷で行われ、日本舞踊、手品、講談、薩摩琵琶が洋館二階の踏舞室で行われており、行事が行われた会場としては、和館は使用されていなかったと考えられる。

また、日本風座敷については『建築雑誌』掲載の図面上では他の室と同じ描写であり、和室か洋室かの判断は不可能であったが、『鍋島家文庫』内の図面では、床の間・違い棚などの座敷飾りが描かれており、洋館内に和室を設けていたことが明らかになった。さて、その日本風座敷の行幸時の使用方法について、1892（明治25）年7月10日の読売新聞では以下のように記されている。

「玉座を設く座下には紫色の絹織の敷物……玉座には紫地に水色菊章の模様ある御椅子」<sup>(40)</sup>

記事から、行幸時には洋館一階の日本風座敷には敷物を敷き、椅子を置いて玉座を設けていたことが明らかになり、和室に敷物と椅子を持ち込むことで、椅子座式で使用していたことが明らかになった。

天皇が使用した以外の室について、洋館一階の客室や応接室は皇族・大臣の控室として使用されており、位の高い人物が滞在する空間としては、客室などのもともと接客空間として使用されている部屋が使用されていることがわかる。また、一階西側の鍋島夫妻の私的空間も行幸時には来賓客の控室として使用されており、行幸時には洋館内のさまざまな部屋が接客用の空間として使用されていたと考えられる。

また、鍋島邸二階の客寝室は行幸時には御厠として使用されており、具体的に誰が使用していたのかは明記されていないが、鍋島邸のもともとの厠は皇族・大臣・供奉高等官の便所として使用されていることから、この御厠は天皇が使用するための専用の便所として設けられていたことが推察される。

#### IV 前田利為邸（1910年7月8日 行幸）

##### （1）前田利為邸の概要（所在地・建築年代・建築様式について）

『明治天皇紀 第十二巻』には行幸が行われた前田邸について

「侯爵前田利為の本郷區本富士町の第に幸す……第は曩に改築する所のもの」<sup>(41)</sup>

とあり、行幸が行われた前田邸は本郷にあり、行幸以前に改築されていたことがわかる。前田邸の概要については、奥富利幸による既往研究が存在し、それによれば、1879（明治12）年に行幸を迎えた前田利嗣には邸宅を改めて再び行幸を迎えるという宿願があり、利嗣の死後、利為はその宿願を実現するために1903（明治36）年に本邸新築を決定した。同年12月に起工、日露戦争による中断を経て1905（明治38）年に和館、1907（明治40）年に洋館が落成しており、前田邸は「和洋館並列型住宅」であったことがわかる。洋館設計者は渡部譲で和館設計は海軍技師の北沢虎造であるとされている。

前田邸は『建築雑誌 第二百六十三号』<sup>(42)</sup>に記事と平面図二枚、外観写真一枚が掲載されている。

この図面は洋館部分のみの平面図であり、図面からは和館に接続されるような渡り廊下は視認でき



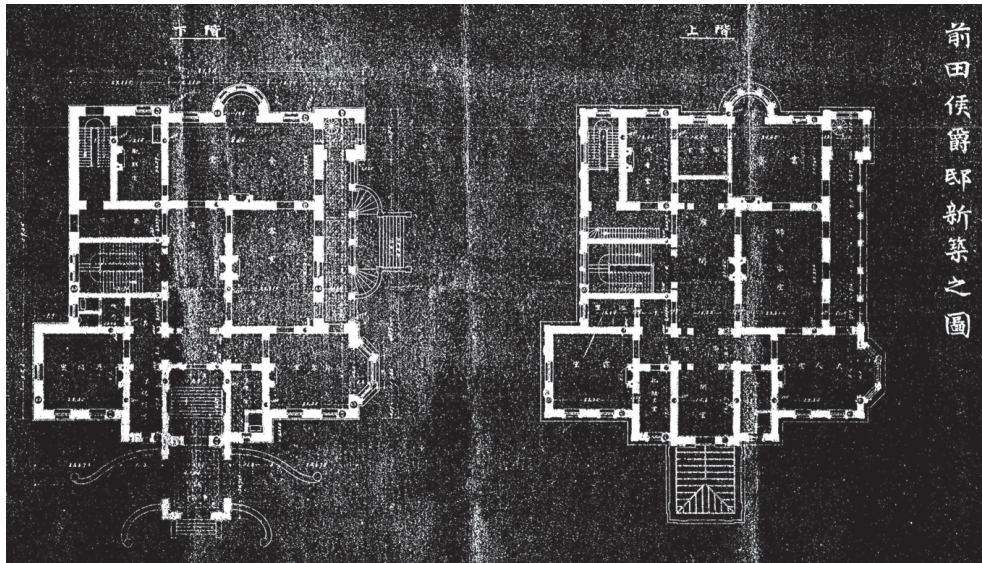


図 21 前田利為邸 洋館一・二階平面図

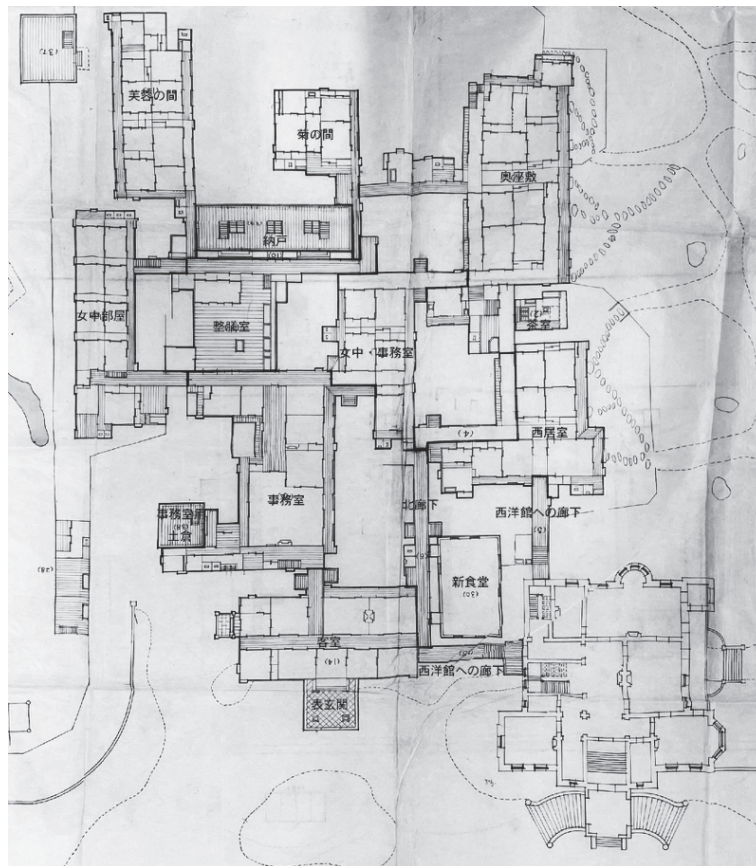


図 22 前田利為邸 配置図<sup>(44)</sup>(筆者撮影)

ないが、前田邸の図面は、東京都公文書館所蔵の内田祥三関係資料内にも残されており、その中に洋館と和館が同時に描かれた図面が存在し、この図面から、洋館北・西側の階段室から、和館へと接続されていたことが明らかになった。

図 22 をみると、洋館に比べて和館の方が規模が大きいことがわかる。前田邸の面積については『建築雑誌』に記述されており、洋館の建坪は約 214 坪であるとされていた。池田邸洋館が 123 坪、

鍋島邸洋館が約300坪であったことを踏まえると、前田邸洋館は特別小規模な洋館ではなく、和館の面積については『前田利為』にて約650坪であるとされており、洋館の約3倍もある大規模な和館となっており、他の研究対象の「行幸御殿」とは和洋館の規模の比率が異なっていることがわかる。

## (2) 前田利為邸の平面構成について

『建築雑誌』内の図面に記されていた室名及び記事内で紹介されていた室名をまとめると、一階には玄関、便所、脱帽室、応接室、小客室、広間、客室、食堂、配膳室があり、二階には閑室、寝室、化粧室、広間、夫人室、婦人客室、書斎、図書館、従者室が設けられている。また、図面は確認できなかったが、地階も存在し、そこには喫煙室、轉球室、厨房、庖丁詰所、食器洗場、皿置場、食料置場、石炭置場、取次人詰所、倉庫、温水機械室が設けられている。

室配置をみると、一階が応接室、客室、食堂を備えた接客空間、二階が寝室、浴室、夫人室、書斎を備えた生活空間で、婦人客室のみ接客空間として設けられており、階で用途が分けられていることが考えられる。また、地階に厨房や倉庫を有していることから、鍋島邸と同じく洋館単独で生活を行うことができたと考えられる。

和館には居室、茶室、奥座敷、食堂、女中室、事務所があり、ここでも接客・生活は行うことができたと考えられ、洋館と和館の両方とも単独で生活空間として使用できたと推察される。

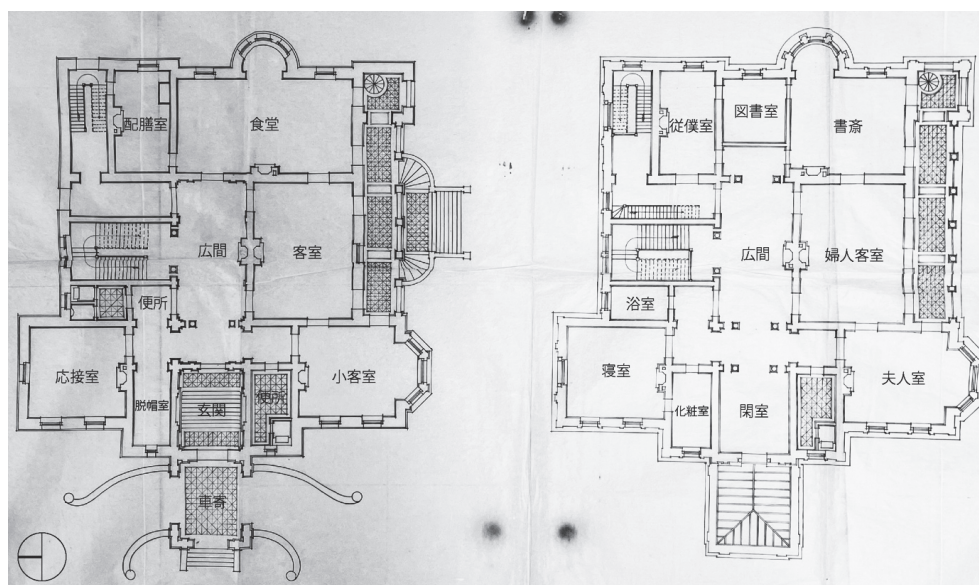


図23 前田利為邸 洋館一・二階平面図<sup>(45)</sup>(室名筆者加筆)(筆者撮影)

## (3) 前田利為邸の行幸時の使用方法について

行幸当日の行動についても、奥富による既往研究にて述べられている。奥富は『明治天皇紀』、『風俗画報』、『ある家族の昭和史』の三つの資料を用いて前田邸行幸の進行表を作成している。本章では、既往研究で明らかにされた行幸内容をもとに他事例と同形式の行動表を作成し、それに加えて、洋館、和館の平面図も併せて使用することで、前田邸の行幸時の使用方法の分析を行う。

『明治天皇紀』には当日の使用室について、以下の記述があり、



表5 前田利為邸 行幸時の行動内容一覧

	内容	使用室
①	前田、玄関にて天皇奉迎	玄関
②	天皇を便殿に先導し、茶菓献上、拝謁、絵画天覧	洋館階下客室
	便殿にて昼食、揮毫天覧	洋館階下客室
③	能楽御覧所にて能楽天覧	能楽御覧所（和館）
④	和館奥座敷に移動し、陳列された家什天覧	奥座敷
	庭園の瀑布の景観を鑑賞	奥座敷
⑤	便殿に復御、侍従長徳大寺実徳に洋館階上各室の巡覧を命じる	洋館階下客室
⑥	余興室に移動し、薩摩琵琶天覧	食堂
⑦	便殿に復御し晚餐御陪食	洋館階下客室
	還幸	

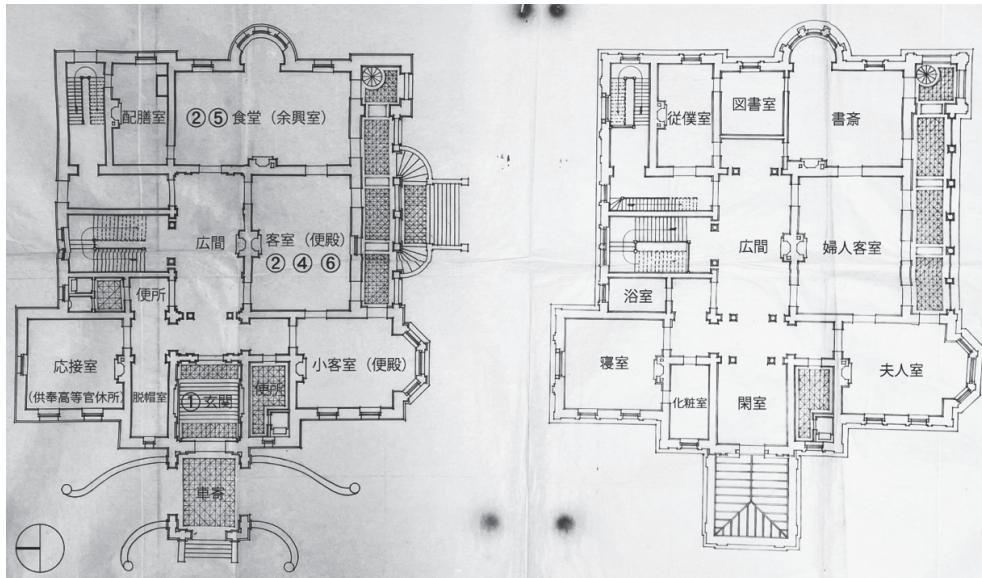


図24 前田利為邸 洋館一・二階平面図（室名・番号筆者加筆）

「洋館階下客室を以て便殿に充つ、次室之れに属す、之に接して食堂あり、餘興室に充つ、應接室あり、供奉高等官の憩息の所と爲す、此の他廣間あり、階上亦客室・婦人室・書斎・廣間あり、皆飾るに家什の珍奇を以てす、別に日本館あり、廊を以て相繋ぐ、即ち奥小座敷西側二室を以て家什陳列の所に充て、又朗子の居室を以て能楽御覧の所と爲し、隣房書斎を以て宸憩の所と爲す」<sup>(46)</sup>

便殿は一階の客室及び小客室に設け、客室に隣接する食堂は余興室、同じく洋館一階の応接室は供奉官の控室として使用され、洋館二階の婦人客室、婦人室、書斎、広間の南面にあたる部屋は家什の展覧場として使用されている。このことから、他事例では洋館二階に便殿を設けていたが、前田邸では洋館一階の客室、小客室を便殿として使用しており、他の事例と使用方法が異なっていることがわかる。

昼食については『前田利為』<sup>(47)</sup>では玉座でとったとされているが、1910（明治43）年7月9日の『読売新聞』では食堂でとったとされており、正確には明らかではない。また、晚餐は便殿でとられ

ているが、その食事の準備については奥富の研究によれば、宮内省大膳課の職員が前田邸和館の膳所で用意したものであると述べられており、洋館地下の厨房は行幸時には使用されていなかったことが推察される。

和館では奥座敷が洋館二階と同じく家什展覧場として使用され、郎子（前田利嗣の夫人）の部屋が能楽御覧所として使用されているが、この室については具体的な場所は明らかではない。

以上のように、前田邸では便殿が洋館の一階に設けられており、この点では他の事例とは異なるが、洋館の便殿に滞在し、能楽などの行事の際には和館が用いられており、前田邸でも洋館が滞在空間、和館が行事の空間として交互に使用されていたことが共通している。

## V 山田・池田・鍋島・前田邸の事例からみる行幸時の邸宅の使用方法

I-IV章では各事例について、建築物の概要、平面構成、行幸時の使用方法を整理・分析した。本章では、各事例の情報を合わせて、行幸時の行幸御殿の使用方法の特徴を分析する

各事例について、行幸実施年月日、竣工年、洋館の構造、面積、設計者、行幸時に天皇が使用した室を整理した表を作成した。

表6 行幸実施年月日、竣工年、洋館の構造、面積、設計者、行幸時に天皇が使用した室 一覧表

山田顕義邸 (1890年6月26日)	1889年12月頃 竣工	煉瓦造二階建て洋館(55坪)・和館・渡部譲設計
		洋館二階寝室(便殿)・和館日本室広座敷(食堂)
池田章政邸 (1891年11月16日)	1891年7月 竣工	木造二階建て洋館(約123坪)・和館
		洋館二階客室(便殿)・洋館一階食堂(食堂)・和館表座敷(講談天覧場)
鍋島直大邸 (1892年7月9日)	1892年7月頃 竣工	煉瓦造三階建て洋館(約300坪)・和館(約300坪)・坂本復経設計
		洋館二階客室(便殿)・洋館一階和室(撃剣天覧場・玉座)・洋館二階踏舞室(手品天覧場)・洋館二階会食室(食堂)
前田利為邸 (1910年7月8日)	1907年 竣工	煉瓦造二階建て洋館(214坪)・和館(約650坪)・渡部譲設計
		洋館一階客室二室(便殿)・洋館一階食堂(余興室)・洋館二階書斎・客室・婦人室(家什天覧場)・和館奥座敷(家什天覧場)

まず、行幸実施年月日と竣工年をみると、前田邸以外は竣工から一年以内には行幸を迎えていることが読み取れる。黒田邸も洋館が落成した一年後に行幸を迎えていることから、前田邸以外の3例は『行幸御殿』としての性質を持っているといえる。ただし、前田邸は竣工から三年後に行幸は迎えているものの、洋館建設の動機は行幸を迎えるためであったことから、竣工年と行幸年が離れていた場合でも、行幸を迎えることを目的に洋館建設が行われる事例も存在することがわかる。

面積について、山田邸は別邸であるため五十五坪と小さいが、他は二〇〇坪ほどの大規模な洋館を建設して行幸を迎えている。また、池田邸は和館の正確な面積は不明だが、図面から判断すると洋館よりやや大きいと考えられ、鍋島邸では和洋館がほぼ同程度、前田邸では洋館の三倍ほどの規模と、事例によって和洋館の面積比が異なっている。これについては、明治3-40年代の事例が前田邸のみであるため、一概にはいえないものの、『行幸御殿』においても、伝統回帰の傾向が強まるにつれて、和館の面積比重が増加していった可能性が考えられる。また、行幸時の使用方法の観点からみると、どの事例でも行幸時には洋館に便殿が置かれ、和館には行事の会場が設けられていることから、



面積にかかわらず、天皇や来賓を接客する場としては洋館が主に用いられていたことが推察され、和洋館の面積と行幸時の使用方法の間には明確な関係は明らかではない。

鍋島邸の事例からは、天皇が使用した以外の室の用途も明らかになり、洋館内の他の室及び和館には主に皇族・大臣・供奉官・来賓客らの控室が設けられており、天皇が使用する便殿や食堂以外にも、洋館全体が行幸時には何らかの用途に使用されていたことが明らかになった。また、前田邸の事例でも洋館応接室が供奉官控室に使用されており、使用方法の傾向は一致している。

天皇の滞在する便殿について、前田邸以外の事例では洋館二階に設けられていることが明らかになった。そのうち、山田、池田邸では一階に二階よりも大規模な客室があるにもかかわらず二階に便殿が設けられていることから、天皇を迎えるにあたっては、その位の高さの表現方法として、客室の規模や質に関わらず、二階に便殿を設ける慣習が存在していたのではないかと推察される。

しかし、前田邸では一階に便殿が設けられている。これについては、次章にて、他の洋館で迎えていた行幸事例についても、便殿の位置を整理することで、年代を追ってさらに分析を行う。

## VI 行幸を洋館で迎えた事例における便殿の位置について

本章では、本稿で対象としている『行幸御殿』の図面が確認できた事例に加えて、洋館の外観写真が存在し、行幸時に洋館で迎えていたことが明らかな事例について、便殿の位置の分析を行う。

### (1)

#### ① 黒田長溥邸（1875年1月31日 行幸）

黒田邸の便殿については『明治天皇紀』に「階上<sup>(48)</sup>の便殿に入御」とあることから、洋館二階に便殿が設けられたと考えられる。

#### ② 大久保利通邸（1876年4月19日 行幸）

行幸が行われた大久保邸については『画報近代百年史 第四集』にて「東京麹町の三年町にあっ



図 25 大久保利通邸 外観写真

た。……一八七六年（明治九年）明治天皇はここに行幸した。<sup>(49)</sup>……」という記述とともに建物の外観写真が掲載されており、その建物は車寄、暖炉煙突、上げ下げ窓を有する洋館である。記述から、これが行幸を迎えた大久保邸の外観写真であることがわかる。

便殿については、『明治天皇紀』では「利通の前導にて玉座に著御」<sup>(50)</sup>との記述のみであり、具体的な位置は不明である。

### ③ 大隈重信邸（1878年4月8日 行幸）

大隈邸について『明治の日本・宮内庁書陵部所蔵写真』において、外観写真が確認できた。写真は正面（図26）と裏側（図27）の2枚あり、洋館には煙突、上げ下げ窓、ペランダが設けられていること、洋館の隣に和館が視認できることから、「和洋館並列型住宅」であったことがわかる。



図26 大隈邸 洋館 外観写真<sup>(51)</sup>



図27 大隈邸 洋館・和館 外観写真<sup>(52)</sup>

便殿について、『明治天皇紀』には、「櫻上に御少憩」<sup>(53)</sup>とあり、1878（明治11）年4月9日の『東京日日新聞』には「玄関の前へ奉迎し参議御先きを導きて楼上へ渡御なり暫く御休息あり」<sup>(54)</sup>と記述があるため、洋館二階に便殿が設けられたと考えられる。

### ④ 徳川家達邸（1887年10月31日 行幸）

徳川家達邸については『旧皇族・華族秘蔵アルバム 日本の肖像第三巻』にて「東京・千駄ヶ谷の徳川邸旧邸は明治10（1877）年10月に完成した洋館・日本館」<sup>(55)</sup>という記述とともに建物の外観写真

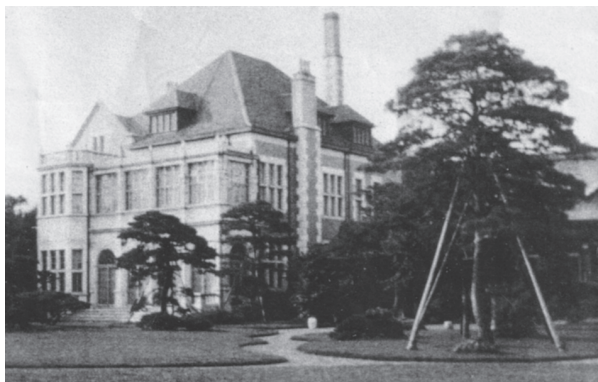


図28 徳川家達邸 外観写真

が一枚掲載されていた。

便殿については『明治天皇紀』にて「先づ便殿に入御あらせられ<sup>(56)</sup>」とあり、1887（明治20）年11月1日の『東京日日新聞』には「家達君の御先導にて正殿へ着御<sup>(57)</sup>」とあるが、具体的な位置は不明である。

#### ⑤ 西郷従道邸（1889年5月24日 行幸）

西郷従道邸については、移築先の『明治村建造物移築工事報告書』にて、その詳細が記されており、報告書内には移築前後の洋館の外観写真および当時の配置図が掲載されている。これによると西郷邸も洋館と和館（日本館）が並んで建てられた「和洋館並列型住宅」であったことがわかる。



図 29 西郷従道邸 洋館 移築前<sup>(58)</sup>



図 30 西郷従道邸 洋館 移築後<sup>(59)</sup>

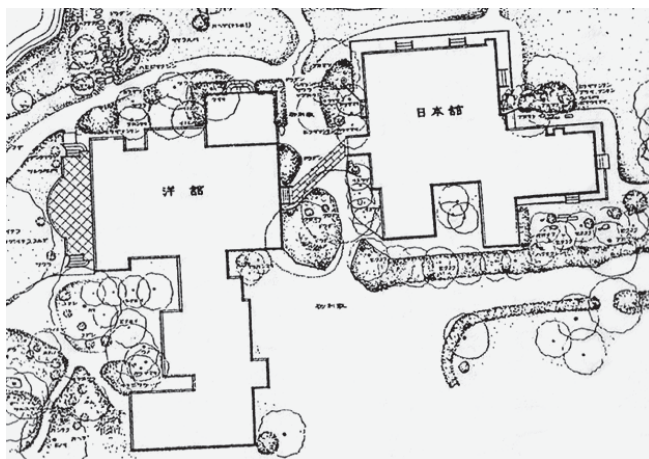


図 31 西郷従道邸 配置図<sup>(60)</sup>

また、便殿については既往研究にて、洋館の二階のベランダ部分に設けられていたことが明らかにされている。<sup>(61)</sup>

#### ⑥ 大山巖邸（1890年11月15日 行幸）

大山邸については、大山柏『金星の追憶』内に洋館の外観写真が掲載されている。また、久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松 日本初の女子留学生』には



「明治二十二年の冬、大山家は永田町の陸軍大臣官邸から青山の穩田に完成した新居に移った。この屋敷は、明治天皇の行幸を予定して建てられたもの…大山巖は約七千坪の敷地を千円で購入し、ドイツ人の建築技師メンツに依頼し二万円をかけてこの私邸を建てた。…洋館の隣には子供達が寝起きする細長い平屋の日本館が続いていました……」<sup>(62)</sup>

との記述があり、大山邸は1889（明治22）年の冬に竣工した洋館で、その建設理由は天皇行幸を予定したものであるとされている。洋館はドイツ人の建築技師に依頼して建設されたもので、この洋館の隣には和館が続いており、大山邸も「和洋館並列型住宅」の形式を用いていたことがわかる。

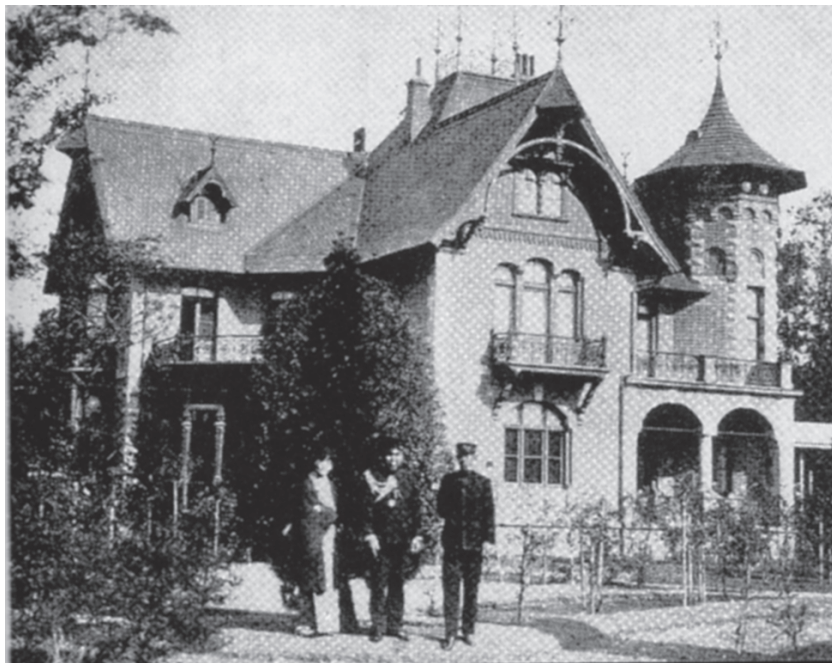


図 32 大山邸 洋館 外観写真<sup>(63)</sup>

『明治天皇紀』には「樓上便殿に著御あらせられ」<sup>(64)</sup>とあり、洋館二階に便殿が設けられていることがわかる。

#### ⑦ 川村純義邸（1891年4月10日 行幸）

川村邸については『明治工業史 建築編』にて

「海軍卿官舎 麻布飯倉の舊天文臺の門前にありたるものにして、河村海軍卿時代の建築なり。即ち明治十三年起工。同十五年竣工にして、建坪六十七坪八合三勺三才、軒高三十一尺なり。洋風二階建木造屋根瓦葺、周圍イギリス下見板合決り取付け、木造之分及び軒樋とも総體ペンキ塗りなり。これ亦コンドルの設計せし當時の美建築の一なりき。」<sup>(65)</sup>

との記述があり、建物は1880（明治13）年に起工、1882（明治15）年に竣工した二階建ての木造洋館であったことがわかる。また、設計はジョサイア・コンドルである。そして、『鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展』には川村邸洋館の写真が掲載されている。





図 33 川村純義邸 洋館外観写真<sup>(66)</sup>

便殿は『明治天皇紀』の「<sup>(67)</sup>樓上便殿に著御あらせられ」の記述から洋館二階であると考えられる。

#### ⑧ 土方久元邸（1893 年 6 月 2 日 行幸）

土方邸については『土方伯』に洋館の外観写真が掲載されていた。写真からは構造などは判別できないが、二階建ての洋館であることがわかる。



図 34 土方久元邸 洋館外観写真<sup>(68)</sup>

『明治天皇紀』には「<sup>(69)</sup>樓上便殿に著御」とあり、1893 年 6 月 3 日の『読売新聞』には「車寄の階下<sup>(70)</sup>に奉迎し階上なる便殿に御先導」とあることから洋館二階に便殿が設けられたと考えられる。

#### (2) 「行幸御殿」の便殿の位置について

以上、外観写真が確認できた 8 事例に加えて研究対象の 4 例の便殿の位置をまとめると、黒田、大

隈、西郷、大山、川村、土方、山田、池田、鍋島邸では洋館二階に便殿があり、前田邸では洋館一階、大久保、徳川邸は不明であった。

このことから、明治 10-20 年代の事例では多くが洋館二階に便殿が設けられており、前田邸の一階に便殿を設ける形式は比較的珍しい事例であると考えられた。前田邸のみが明治 40 年代の行幸事例であることから、迎える時期によって行幸の形式が変化している可能性が考えられる。

## おわりに

本研究では、天皇行幸を迎えた「行幸御殿」のうち、図面が現存する 4 事例について、行幸時の使用方法にどのような特徴が存在したのかについての分析を行った。

まず、4 事例の邸宅の平面をみると、山田、池田、前田邸では洋館一階に客室や食堂などが設けられ、二階に寝室や化粧室などが設けられており、一階が接客空間、二階が生活空間として階で空間が分けられる傾向にあったことが明らかになった。しかし、鍋島邸については一階に客室や座敷などがあるが、それに加えて寝室、婦人室など生活空間も配置されており、二階には客室、踏舞室、食堂が設けられていることから、一階の半分と二階が接客、一階の半分が生活空間として設けられており、邸宅によっては接客と生活の空間の構成に違いがあることがうかがえる。

また、山田、池田邸洋館には台所や浴室がないことから、洋館と和館で併せて生活空間として使用していたことがうかがえるが、鍋島、前田邸には洋館にも台所と浴室があり、特に鍋島邸洋館には和室も設けられていたことから、洋館単独でも生活と接客の両方対応できるように計画されていたと考えられる。また、池田、鍋島邸は洋館と和館の規模は同程度、前田邸和館は洋館の三倍ほどの規模があり、面積に関しても各事例で違いが存在する。このように、明治時代に行幸を迎えたという点では同じ分類にあたる「行幸御殿」についても、その平面や面積をみると、各事例でさまざまな違いがあり、「行幸御殿」特有の特徴は確認されなかった。

しかし、行幸時の使用方法をみると、4 事例で共通して、洋館に天皇の滞在する便殿が設けられ、和館は能楽などの行事の会場として使用されており、邸宅の規模や平面構成に関係なく、天皇を迎える空間としては洋館が主に使用されていたと考えられる。

ただし、便殿の位置については、前田邸以外の 3 事例では洋館二階に設けられており、山田邸や池田邸では一階のより大規模な客室ではなく二階の室が使用されていることから、室の規模や質に関わらず、便殿は二階に配置することが志向されていたことが考えられる。しかし、前田邸では洋館一階の客室二室が使用されており、洋館二階の部屋は家什展覧場として使用されており、前田邸のみ他の事例とは異なる形式で迎えていた。

この便殿の位置については、図面は確認できないものの、洋館の外観写真が確認できた「行幸御殿」8 事例についても研究対象として追加し、便殿の位置を分析した。その結果、洋館で迎えていた 8 事例のうち 6 事例では洋館二階に便殿が設けられていた。この 8 事例は 1875（明治 8）年に行幸を迎えた黒田邸から 1893（明治 26）年に迎えた土方邸と、明治初期から 20 年代までの幅広い時期にわたっていることから、洋館で迎えた事例については、明治時代を通して、行幸時には洋館の二階に便殿が設けられていたと推察される。

以上のことから、明治時代の「行幸御殿」は、規模や面積には違いがあるものの、行幸時の使用方法をみると、洋館は主に接客空間として使用され、和館は裏方や行事の会場として使用される形式が共通していたことが明らかになった。また、もう一つの特徴として、天皇の滞在する便殿は室構成や客室の規模にかかわらず二階に設けられることが多く、「行幸御殿」では天皇の位の高さを表現するために、二階に便殿を設けるという形式が存在したと考えられた。

## 注

- (1) 『建築雑誌 第百五十号』、造家学会、1899 年
- (2) 同上書、pp. 173-174
- (3) 同上書、p. 179
- (4) 前掲注 (3) に同じ
- (5) 内田青蔵『日本の近代住宅』、鹿島出版会、p. 22、1992 年
- (6) 新村出『広辞苑 第六版』、岩波書店、p. 2970、2008 年
- (7) 内田青蔵『日本の近代住宅』、鹿島出版会、pp. 19-20、1992 年
- (8) 明治時代に行われた行幸について、本稿で対象としている事例は天皇が上流層の私邸に訪れたものとしているが、行幸が行われる理由は複数存在する。多くは遊興や上下和楽といった目的を持って行われていたが、太政大臣の三条実美や右大臣の岩倉具視などの特に高位な人物については、天皇が見舞いを目的に行幸を行うことがあり、その他の行幸とは意味合いが異なる事例も存在する。
- (9) 明治天皇聖蹟保存会編『明治天皇行幸年表』、大行堂、1933 年
- (10) 山本昌宏「明治天皇の行幸が行われた住宅における和洋各館の所在と竣工年について」『日本建築学会関東報告支部』、pp. 441-444、2002 年  
 平山育男「旧西郷従道住宅の建築年代と住宅の整備について」『日本建築学会計画論文集 第 81 巻第 728 号』、pp. 2289-2296、2016 年
- (11) 宮内庁編『明治天皇紀 第七巻』、吉川弘文館、pp. 579-580、1972 年
- (12) 『山田顕義伝』、日本大学、1963 年
- (13) 『建築雑誌 第三十号』、造家学会、pp. 106-107、1889 年 6 月 28 日
- (14) 前掲注 (13) に同じ
- (15) 前掲注 (13) に同じ
- (16) 前掲注 (13) に同じ
- (17) 前掲注 (13) に同じ
- (18) 前掲注 (11) に同じ
- (19) 浅野伸子、平井聖「明治期の東京における池田侯爵邸についてその 1——旧大名池田家にみる明治期の屋敷の変遷——」『日本建築学会大会学術講演会梗概集 (北陸)』、pp. 587-588、2019 年 9 月  
 浅野伸子、平井聖「明治期の東京における池田侯爵邸についてその 2——明治 24 年頃の大崎本邸の建物とその建築経緯——」『日本建築学会大会学術講演会梗概集 (関東)』、pp. 123-124、2020 年 9 月
- (20) 林原美術館 (岡山市) 所蔵『金婚式写真帖』
- (21) 前掲注 (20) に同じ
- (22) 岡山大学附属図書館所蔵「C12-197 大崎邸建築費受払勘定」『池田家文庫』、1893 年
- (23) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-23 大崎邸敷地建物図」『池田家文庫』、1889 年
- (24) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-2 大崎邸庭園図」『池田家文庫』、1889 年
- (25) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-28-3 大崎邸西洋館階下平面図百分之一図」『池田家文庫』、1889 年

- (26) 岡山大学附属図書館所蔵『池田家文庫』「T5-156-28-2 大崎邸西洋館平面百分之一之図」、1889 年
- (27) 岡山大学附属図書館所蔵『池田家文庫』「T5-156-19 大崎邸建造物平面図」、1889 年
- (28) 岡山大学附属図書館所蔵『池田家文庫』「C6-433 明治天皇行幸書類」、1891 年
- (29) 前掲注 (25) (26) (27) の図に筆者が加筆したもの
- (30) 宮内庁編『明治天皇紀 第八卷』、吉川弘文館、pp.103-104、1973 年
- (31) 金谷匡高、高村雅彦「旧三井家拝島別邸（啓明学園北泉寮）について」、日本建築学会学術講演梗概集（北陸）、2010 年
- (32) 『建築雑誌 第五十九号』、造家学会、pp.267-268、1891 年 11 月 28 日
- (33) 梨本伊都子『三代の天皇と私』、pp.28-30、1975 年
- (34) 公益財団法人鍋島報効会所蔵 永田町鍋島邸 西洋館
- (35) 工学会編『明治工業史 建築編』、工学会明治工業史発行所、p.745、1927 年
- (36) 小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記皇族妃の見た明治・大正・昭和』、小学館文庫、pp.24-29、2008 年
- (37) 近藤正一編『名園五十種』、博文館、p.185、1910 年
- (38) 『一万分一地形図』、1908-1909 年測図
- (39) 梨本伊都子『三代の天皇と私』、pp.28-30、1975 年
- (40) 『読売新聞 朝刊』1892 年 7 月 10 日
- (41) 宮内庁編『明治天皇紀 第十二卷』、吉川弘文館、pp.432-433、1975 年
- (42) 奥富利幸「近代華族住宅の行幸における和洋館の使い分けについて——明治 43 年 7 月 8 日前田利為邸行幸を通して——」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』、2002 年 8 月
- (43) 『建築雑誌 第二百六十三号』、建築学会、pp.267-268、1907 年 11 月 25 日
- (44) 「前田侯爵邸配置図」『内田祥三関係資料』、1925 年
- (45) 「侯爵前田邸洋館新築平面図」『内田祥三関係資料』、1925 年
- (46) 前掲注 (41) に同じ
- (47) 前田利為侯伝記編纂委員会『前田利為』、1986 年
- (48) 宮内庁編『明治天皇紀 第三卷』、吉川弘文館、pp.391-392、1969 年
- (49) 日本近代史研究会『画報近代百年史 第 4 集』、国際文化情報社、pp.331-332、1951 年
- (50) 宮内庁編『明治天皇紀 第四卷』、吉川弘文館、pp.590-591、1970 年
- (51) 武部敏夫・中村一紀『明治の日本・宮内庁書陵部所蔵写真』、吉川弘文館、2000 年
- (52) 前掲注 (51) に同じ
- (53) 宮内庁編『明治天皇紀 第四卷』、吉川弘文館、pp.394-395、1970 年
- (54) 1878（明治 11）年 4 月 9 日 東京日日新聞朝刊
- (55) 大久保利謙『旧皇族・華族秘蔵アルバム 日本の肖像第三卷徳川将軍家徳川慶喜家一橋徳川家』、毎日新聞社、p.18、1989 年
- (56) 宮内庁編『明治天皇紀 第六卷』、吉川弘文館、pp.832-833、1971 年
- (57) 『東京日日新聞 朝刊』1887 年 11 月 1 日
- (58) 博物館明治村編『明治村建造物移築工事報告書 第一集』、博物館明治村、p.43、1978 年
- (59) 同上書、p.21
- (60) 同上書、p.5
- (61) 平山育男「旧西郷従道住宅の建築年代と住宅の整備について」『日本建築学会計画論文集 第 81 巻 第 728 号』、pp.2289-2296、2016 年
- (62) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松 日本初の女子留学生』、中公文庫、pp.233-236、1993 年
- (63) 大山柏『金星の追憶 回顧八十年』、鳳書房、1989 年
- (64) 宮内庁編『明治天皇紀 第七卷』、吉川弘文館、p.274、1972 年
- (65) 工学会編『明治工業史 建築編』、工学会明治工業史発行所、pp.144-145、1927 年



- (66) 鈴木博之、藤森照信、原徳三『鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展』、建築画報社、p. 77、2009 年
- (67) 宮内庁編『明治天皇紀 第七巻』、吉川弘文館、pp. 788-789、1972 年
- (68) 菴原鉋次郎、木村知治『土方伯』、1913 年
- (69) 宮内庁編『明治天皇紀 第八巻』、吉川弘文館、pp. 257-258、1973 年
- (70) 『読売新聞 朝刊』1893 年 6 月 3 日